フエ郊外ディアリン村の形成と主要氏族の変遷

――収集資料・文書資料および聞き取り調査を通じて――

岡　本　弘　道

Formation of Settlement and Transition
of Major Clans in Dia Linh, a Suburb of Hue

Okamoto Hiromichi

関西大学・文化交渉学研究拠点が実施したフエ地域でのフィールド調査の中で、ディアリン村で行った主要氏族の家譜資料調査の概要を紹介し、ディアリン村の村落としての形成と主要氏族の変遷について考察を加える。「六大族」と称されるディアリンの主要氏族の中で、開耕氏族と目されるのは３つの黎族であるが、それぞれの位置づけは必ずしも明確でない。本稿では主要氏族の家譜資料調査を通して、３つの黎族を中心とする開耕氏族の枠組みと、主要氏族の変遷について論じ、19世紀初頭に定められたと考えられる「開耕氏族・黎族」の“創造”についての仮説的解釈を提示する。

キーワード：ディアリン、開耕氏族、家譜資料、村落共同体

はじめに

関西大学・文化交渉学研究拠点によるフエ都城旧外港集落のフィールド調査対象地域の中で、調査が進行するに従いその位置づけを大きく変化させた地域がディアリン（地霊：Địa Linh）である。調査着手時点では問題関心の比重が「明郷」などの華人系住民や商業ネットワークに置かれていたため、手工業主体の集落と見られていたディアリンでの調査に対する期待は必ずしも大きくなかった。しかし、調査の過程でまとまった地簿資料の存在が明らかとなったことなどもあり、ディアリンは次第にその重要性が認識されるようになり、調査内での比重が高まっていったのである。ディアリンでは、村の祭祀を行う亭（ディン）や神を祭る廟、および主要氏族の成員が保管している家譜資料などを中心に調査を行った。本稿では、2008年度・2009年度におけるディアリンでの文献調査班の調査内容を紹介し、その中で得た知見を元に、ディアリンの歴史的変遷と村落共同体としての性格について若干の考察を試みたい。

１．ディアリンの「六大族」

ディアリンにおいて、村落共同体の中心を占める主要氏族は「六大族」と呼ばれる。具体的には、黎族・阮族・陳族・張族・李族・黄族がそれに該当する。このうち最も高い地位を占め、開耕氏族とされる黎族は実際には黎福族・黎文族・黎有族の３つの氏族に分かれるため、合計で８氏族となる。ディアリンにおける開耕氏族は黎族とされているが、この３つの黎族のうちのいずれが真に開耕氏族に連なる黎族なのかという点については、実は村落内でも決着を見ていない。そのためもあってか家譜閲覧に当たってはいささかの困難が伴ったが、幸いにして全ての氏族について家譜資料の収集を行うことができた。以下、各氏族について収集した家譜資料の概要と、聞き取り調査による情報を紹介する。

１）黎福族

2010年３月23日に調査を行う。『黎福族宗譜』、ベトナム語家譜のコピー本一冊、及び手書きの系図を閲覧・撮影し、また第12世のLê Phước Thông（56）氏から聞き取り調査を行った。

『黎福族宗譜』

序文に「保大二年歳次丁卯十一月初六日」の日付があり、また巻末の記述より、同年十一月十五日にこの家譜が完成したことがわかる。記録の随所に生年・没年の干支年表記があり、家譜編纂時に族長であった第九世の黎長存の没年（保大十三年（1938）・後に附記された記述より）から逆算すると、第一世の黎福富は1616年（丙辰年）生まれであることがわかる。ディアリンに移住してくる前の本貫地については記載が無く、不明である。第二世・黎福言夫婦の墓が美利邑（ミーロイ：Mỹ Lợi）にあり、また第三世・第四世の中に「流居美利」とされる人物が多く見られることから、17世紀後半段階から、少なくとも黎福族とミーロイとは深い関係にあったと考えてよい。ただし、第三世以降の墓地はほとんど「本社地方」に限られる事から、遅くとも18世紀中葉までにはディアリンに定住するようになったと考えられる。

なお、第八世・第九世になると、他の社の官員との婚姻関係を示す記述が散見されるようになる。これが果たして19世紀中葉以降の現象なのか、あるいはそれ以前の状況が記録として残されていないのかについては、今のところ不明である。

２）黎文族

2009年９月１日に調査を行う。『黎族尊譜』『黎支家譜』を閲覧・撮影し、また族長の第７世・Lê Văn Dan（77）氏から聞き取り調査を行った。

『黎族尊譜』

辛卯年季秋／1951年に編纂。中表紙の題名は「地霊社黎族尊譜世系恭録」。内容は「黎族生諱日」「黎族凡例」「黎族図式土墓」「黎族通為土墓」「黎族宗図統系」及び各世代の記録で構成されており、非常に豊富な情報を含んでいる。

嗣徳35年の家譜編纂時に付けられた序文、及び初代の黎文誠の項の記述によると、黎文族の祖先はもともと嘉定省城（現在のホーチミン）にいたが、嘉隆帝の北伐に従って功績を挙げ、癸亥年・1803年よ

り地霊に居住するようになったという。なお、家譜本文には「即陽暦～年」という形式で西暦年等の割注が附されているが、これは恐らく1951年編纂時に追補されたものと思われる。

現在も、ディアリンの中では最も大きな一族であるという。また、後述するディアリンの村落墓地の西北に位置する「開耕神の墓」も、この黎文族のものであるという。

3）黎有族

2010年３月25日に調査を行う。『黎族目録』を撮影し、また第８世のLê Hưu Hoàng（69）氏から聞き取り調査を行った。

『黎族目録』

「歳次庚戌年四月十三日　嗣孫黎有誠奉重修」との記載があるが、庚戌年に該当するのは1910年、もしくは1970年であろう。後にベトナム音註がボールペンで書き加えられている。第一世から第七世までの記載があり、後代になると干支年による生年の記載が見られるようになるが、初代までさかのぼることはできない。配偶者の出身地・一族女性の嫁ぎ先などが概ね記載されているため、婚姻に伴う人の移動をまとまった形で追うことが可能である。

4）阮族

2008年９月１日に調査を行う。漢字表記・線装の家譜２冊（『(阮族世譜)』『(阮族目録)』）及びベトナム語家譜１冊を閲覧・撮影し、また第７世のNguyễn Văn Hiền氏（1939年生）から聞き取り調査を行った。

『(阮族世譜)』『(阮族目録)』

『世譜』には啓定丁巳年（二年・1917）の序文がある。『目録』の方もほぼ同文ながら己丑年（1949年）の日付のある序文を載せる。内容的には、『世譜』より『目録』の方がやや新しい情報を含んでいる

もともと先祖は承天府豊田県正禄総正禄社にいたが、恐らくは軍役に伴う移動で地霊に居住するようになる。後、子孫はラーケー等に移住したという。

5）陳葉族

2009年８月31日に調査を行う。大工の神である霊和祠の南隣にある第８世・Trần Văn Tuấn（61）氏の居宅で聞き取り調査を行い、家譜・文書資料を閲覧・撮影した。また、霊和祠にかかわる勅封状２件もここで閲覧した。

『陳葉家譜第三』

陳葉族の第三支族の家譜であり、「己丑年孟春」（1949年）の編纂と見られる。「陳葉墳墓」「陳葉図式土墓」「陳葉宗図内叙」及び第三世～第六世の記載がある。家譜のスタイルとしては、黎文族の家譜とかなり似通っており、直接参考にした可能性もある。第三世・陳文徳の項の記述によると、陳葉族の祖先はもともと広治省に住んでおり、陳文徳の代の甲辰年・1882年（ただし、甲辰年は1844年か1904年なので、換算が間違っている可能性あり）に地霊社に居住するようになったという。

６）張族

2010年３月25日に調査を行う。『張族家譜』の閲覧・撮影、および第４世（家譜によると第５世）のTrương Văn Gái（76）氏から聞き取り調査を行った。

『張族家譜』

ベトナム語序文の末尾に1984年の日付がある。構成員の名前など一部漢字表記があるが、大部分の記述はベトナム語のみで書かれている。第一世から第六世までの記述がある。

７）李族

2010年３月24日に調査を行う。家譜２冊の閲覧・撮影、及びLý Văn Ngô（70）氏より聞き取り調査を行った。

『(李族家譜)』

「保大元年正月二十日」の日付があり、編纂は1926年と見られる。李族は広治省海陵県安人総忠丹社からディアリンへ移住した。世代数が明記されておらず、構成員の名前を列挙する簡潔な記載形式であるが、その記載によると欽天監の官員を数名輩出している様子である。家譜は近年の水害で水浸しになり、ビニール袋で保存されていたせいもあってカビが生えており、保存状況は良くない。末尾の方はボールペンで、しかし漢字で記載がなされており、1926年以後の追記と見られる。

８）黄族

2010年３月24日に調査を行う。『地霊社黄文族譜』の撮影・閲覧、及び第11世のHoàng Văn Thông（79）氏より聞き取り調査を行った。

『地霊社黄文族譜』

庚戌年の重修と記載されており、1910年もしくは1970年の編纂と見られる。聞き取りでは現在の家譜は50年前に抄写したものとのことであったので、それが正しければ原本の成立は1910年ということになる。しかしながら、家譜成書後になされた書き込みを見ると、第八世の段階で20世紀に生まれた人物ということになるようである。また、巻末の跋文は「天運庚戌年」としており、ここに名前の見える第８世・黄文松（己酉年生：恐らくは1909年）は保大11年（1936）に「充関公祠百戸」との記載もある。これらを考え合わせると、やはり1970年重修と考える方が適切であろう。その他に維新２年（1908）の序文もある。第一世から第九世までの記述がある。

２．ディアリンの開耕氏族としての３つの黎族

１）地霊亭（ディン・ディアリン）の構成と開耕祖廟

フオンヴィン社人民委員会の裏手、フオン川に面した場所にある。川の方から眺めると、正面にビンフォンが置かれている。

３つの建物による構成で、向かって右側から本堂・開耕祖廟・開耕者の娘を祀るアムが配置されている。本堂の正面は「会同（Hội đồng）」を、向かって右側にはベトナムの歴代６王朝の皇帝（丁、黎、李、

陳、黎、阮）を祀り、向かって左側には村の全ての氏族（３つの Lê［黎］、Hoàng［黄］、２つの Nguyễn［阮］、Trương［張］、Trần［陳］、Lý［李］、Tạ［謝］、Phạm［范］）を祀っているとのことであった。

さて、開耕祖廟の、中央奥に配置されている三つの位牌は、開耕者とその息子を祀るものである。

右側位牌：「純信謹禮功臣勇亮伯」
中央位牌：「前開耕偉績黎貴公」
左側位牌：「宣力佐治功臣富義子」

地霊亭・開耕祖廟の位牌

この「黎貴公」は果たしてどの黎族を指すかという点については、村落内部でも意見の一致を見ていない。2010年３月調査時に村長に聞いた話では、かつて村落内で各黎族の家譜の閲覧が提案された際も、それぞれの黎族は拒否したという。今回の調査から判断する限りでは、３つの黎族の世代数は、黎福族が12世、黎文族が７世、黎有族が８世であり、黎福族の家譜に見られる墓地の記載から黎福族は遅くとも18世紀中葉までにはディアリンに定住するようになったと考えられる。一方ディアリンの中では最も大きな一族とされる黎文族の始祖黎文誠がディアリンに住むようになるのは阮朝最初期の1803年とその家譜に明記されている。黎有族に関しては家譜記載のみではそのディアリン定住の時期を判断できないが、以上の状況から見て最初に地霊に住み着いたのは黎福族と考えて間違いないと思われる。だが、そうだとすれば、黎福族より後の19世紀初頭にディアリンにやってきた黎文族の黎文誠が「開耕神」として村落墓地の一番奥に葬られているという事実をどのように判断すればよいのだろうか。

２）ディアリン村落墓地の開耕神の墓

ディアリンの北西端、ディアリン村落墓地の一番奥まったところに、ディアリンの開耕神の墓がある。他の墓と比べてもひときわ風格のあるこの墓は、その墓碑銘によると保大乙酉年、西暦1945年に改葬されたことがわかる。墓碑銘からはこの墓が最初につくられた時期はわからないが、黎文族の『黎族尊譜』所収の地図にはこの墓の位置も記載されており、この開耕神の墓が黎文族の始祖である黎文誠の墓であることはほぼ間違いがないであろう。

とすれば、この事実は前述した家譜調査の結果とは齟齬を来すものと考えられる。ディアリン村の始祖たる開耕神・黎文誠は少なくとも黎福族がディアリンに定住した後にやって来たということになるからである。この「矛盾」は一体どのように解釈すればよいのであろうか。現時点ではひとまず以下の仮説を提示しておきたい。すなわち、ディアリンでは18世紀中葉までに黎福族が定住するようになり、恐らくはそれにやや遅れる形で黎有族もディアリンに住むようになった。そこへ黎文族の黎文誠が阮朝・嘉隆帝に付き従ってフエにやって来て、ディアリンに住むようになった。ディアリンへの定住の時期は

ディアリン村落墓地の開耕神の墓とその墓碑銘

遅れるものの、阮朝の功臣の一人である黎文誠は村落共同体のヒエラルキーの上位に組み込まれることとなり、先住の黎福族・黎有族と黎文誠の黎文族とを合わせて「開耕氏族・黎族」とする認識が村落内部で共有されるようになったのではないだろうか。

このように考えると、本稿冒頭で述べたよな「３つの黎族のうちのいずれが真に開耕氏族に連なる黎族なのかという点については、実は村落内でも決着を見ていない」という現状は、実は話の順序を取り違えた非生産的な論争なのではないかということになろう。むろん、以上の推測はあくまでも仮説に過ぎないのではあるが、氏族巻の序列争いに対する現実的な妥協案として十分検討に値するものとは言えるのではないだろうか。

小　結

言うまでもなく、以上はディアリンで調査した主要氏族の家譜の概況に基づく推測に過ぎず、ディアリン村（地霊社）の形成と変遷を本格的に論じるには、まだまだ不十分な分析に留まっている。とはいえ、黎文誠がディアリンに定住するようになる19世紀初頭に、ディアリンの村落共同体としての枠組みが用意されたと見ることは穏当であろう。また、他の氏族の家譜によっていわゆる現在のディアリンの六大族が揃うのは早くても19世紀末から20世紀初頭であること、一方ディンで祀られている氏族のうち、

Tạ（謝）と Phạm（范）という２つの氏族、および現存する阮族とは異なるもう一つの「阮族」が「大族」から外れていることも確認できた。ディアリン村の村落共同体としては相応の人的流動性が認められる一方で、「開耕氏族・黎族」を頂点とする共同体としての秩序の枠組みは、恐らく19世紀初頭以降大きく変化していないのではないかという推測も成り立つのではないだろうか。つまり、先行して地霊社に住み着いていたと見られる黎福族および黎有族と、19世紀初頭に阮朝皇帝に付き従ってフエに移動し、地霊社に居住する事になった黎文族を軸とした秩序構造が、その後の新来の氏族を取り込みながら機能してきたのではないか、という推測である。このような共同体の変遷は決して珍しいものではないであろう。しかし、隣接する村落であるバオヴィンでは、15世紀に遡ると考えられる開耕三族に対して、19世紀後半から20世紀前半にかけて「阮族十二尊族」と総称される新来の氏族グループが台頭し、村落共同体の主導権を握るという状況が確認できる。このようなバオヴィンの状況と比較する時、ディアリンの主要氏族の変遷状況は対照的な実例と言って良いのではないだろうか。